

学士課程での基礎看護学実習 I における社会福祉施設での学習効果

杉本 幸枝*・山本 智恵子・吉田 美穂・田澤 茉莉奈・土井 英子

新見公立大学看護学部

(2015年11月18日受理)

基礎看護学実習 I (施設実習) の実習記録の内容を分析することで、実習での学びを明らかにし、実習の効果や今後の課題を検討することを目的とした。2014年度に実習を行い、研究協力の得られた30名が提出した実習記録を分析対象とし、内容分析を行った。その結果、【看護の役割】【障害をもつ利用者の理解】【利用者の状況】【快適な環境づくり】【非言語的コミュニケーションの困難さと重要性】【施設の方針】【他職種との連携】の7カテゴリーが抽出された。実習の5つの目標はすべて記述されており、目標は達成されていた。病院実習と比較すると、重症心身障害児(者)施設は生活の場であり、実習を通して看護の場の広がりを実感するとともに、既習理論を活用した意味づけができていた。一方で、実習前に重症心身障害児(者)のイメージができていない学生が困惑を感じていた。事前学習の充実とオリエンテーションでの映像を活用した重症心身障害児(者)の対象を理解して実習に臨む必要性が示唆された。

(キーワード) 基礎看護学実習, 社会福祉施設, 学習効果

はじめに

看護学教育の在り方に関する検討会では、社会的ニーズの変化に対応できる看護基礎教育を行うために、看護実践能力の必要性が示された¹⁾。学士課程における看護実践能力において臨地実習の意義は大きく、早期体験実習がその後の学生の成長に大きく影響を及ぼしている²⁾。早期体験実習は入学後早期に行われる臨地実習として1995年頃から看護教育で導入され、21世紀の医療者の育成に関する施策の中で提言されている。その効果については、学生の課題の明確化³⁾、コミュニケーション能力の重要性⁴⁾などの研究がなされている。これらはすべて病院での実習体験をまとめているものである。本学でも、早期体験実習としての病院実習における効果については検証を行っている⁵⁻⁷⁾。前回の調査の結果、早期病院実習は初学者にとって効果的であり、看護師の役割の理解に関する記述は多かった。しかし、患者の生活の理解の記述が少なく患者の療養生活への意識づけが課題であることを明らかにしている⁷⁾。

基礎看護学実習 I では病院実習に加えて、看護の場の広がりを中心に、2010年から社会福祉施設として重症心身障害児(者)施設での実習を導入している。しかし、重症心身障害児(者)施設での実習については検証を行っていない。さらに、他大学においても、社会福祉施設で行われる基礎看護学実習に関する研究はほとんどみられていない。

そこで、大学で行われる基礎看護学実習 I (施設実習) の実習記録の内容を分析することで、重症心身障害児(者)施設での実習の学習効果を明らかにし、実習の効果や今後の課題を検討することを目的とする。

1. 研究方法

1. 研究対象：A大学看護学部において、2014年度に基礎看護学実習 I (施設) を履修した64名のうち、研究協力の得られた30名の提出した実習記録
2. 研究期間：2015年7月～8月
3. データ収集方法：基礎看護学実習 I (施設) 終了後、各自が提出した実習記録 A4用紙2枚のうち、30名分をデータとした。
4. 分析方法：30名の実習記録を、学びの意味を汲み取りながら一文一意味になるようにコードを抽出した。抽出した内容を類似した意味内容ごとに分類し、質的に内容分析を行った。分析については、研究者間で繰り返し検討を行った。
5. 倫理的配慮：基礎看護学実習 I (施設実習) の評価終了後、研究対象者に研究の主旨を説明した。研究の匿名性、研究協力は自由意思によるものとし、成績評価には一切影響しないこと、研究協力をしないことで不利益を受けることがないことを文書と口頭で説明し、再度研究用に提出してもらった。提出されたことで研究協力が得られたものとした。

*連絡先：杉本幸枝 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

II. 基礎看護学実習Ⅰの概要

基礎看護学実習Ⅰは1年次通年で3回に分けて実施している。6月初旬に病院にて看護師について行動することで、「患者の生活や看護師の役割の理解」を目的に1日実習を行っている。夏季休業期間に行う訪問実習は2日間で、「異世代とのコミュニケーション能力の向上と在宅での看護技術の実施」を目的に行っている。実習内容は学生個々で訪問先を決定し、その方に看護援助を行う実習である。学生の多くは祖父母などの家を訪問するケースが多い。10月下旬に行う重症心身障害児（者）施設（B施設）での実習は「重症心身障害児（者）の生活や対象の理解とコミュニケーション能力の向上」を目的に1日実施している。まとめの1日と合わせて5日間で行っている。基礎看護学実習Ⅰの目的及び目標、実習方法を以下に示す。

<目的>

看護が実践されている場を通して、看護の対象と対象の抱える問題、看護の機能を理解する。また、対象者とコミュニケーションを図る能力を養うとともに、看護者としての基礎的能力を養う。

<目標>

1. 対象者と直接的・間接的に関わることにより、看護の対象者の生活状況を理解できる。
2. 対象者の生活を取り巻く環境について理解できる。
3. 看護の場における対象者と看護者の援助関係について理解できる。
4. 病院・施設・家庭の機能について理解できる。
5. 看護者としての基本的態度を養うことができる。

<重症心身障害児（者）施設実習の方法>

B施設は医療型障害児入所施設・療養介護事業所として、知的障害と身体障害を併せ持ち、各々の障害が重度（重度心身障害）学生の事前学習として、重症心身障害児（者）及び脳・神経系の構造と機能についてレポートを提出し、実習に臨んでいる。午前中は、資料館にて施設の設立目的や歴史、活動状況について担当者から説明を受けている。その後、看護師長から看護方針や重症心身障害児（者）施設全体のオリエンテーションがある。各病棟8名ずつに分かれ、病棟実習を開始する。病棟内のオリエンテーションの後、看護師の指導のもと、利用者に関わる。実習終了後、各病棟でまとめの会を行っている。

III. 結果

研究協力が得られ、提出された30名の実習記録を分析

した結果、1154コードが抽出された。内容を分析したところ、表1のように33サブカテゴリー、7カテゴリーが抽出された。カテゴリーは、【看護の役割】、【障害をもつ利用者の理解】、【利用者の状況】、【快適な環境づくり】、【非言語的コミュニケーションの困難さと重要性】、【施設の方針】、【他職種との連携】とした。以下、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは [], コードは< >で示す。

最も多かったコード数のカテゴリーは、【看護の役割】であり、296コード、5サブカテゴリーで構成した。学生は<刻々と変化する利用者の生き方に合った援助の方法を追求し提供することも重要である>ことから、【看護師の援助内容】を学んでいた。<生涯をここで生活する人がほとんどいると考えると、利用者さんとの間に信頼関係が何より重要である>ことから、【信頼関係の大切さ】などの看護の姿勢について学んでいた。<たとえ毛穴ほど小さな変化であっても、それを見逃さない観察をする><そのためバイタルサインのチェックなどがとても重要になってくるのである>ことから【観察の大切さ】を学んでいた。また、<病院と違ってナースコールがないことから観察が重要である>ことも挙がっていた。次に、<利用者の安全を第一に考えており命には代えることができない>ことから、【安全対策】を常に考えていることを学んでいた。<オーダーメイドの看護という言葉があったが、利用者の気持ちを一番に考えていた>ことから、【個別性の尊重】とした。これらの5つのサブカテゴリーから【看護の役割】とした。

次に多かったカテゴリーは、【障害をもつ利用者の理解】で、239コード、7サブカテゴリーで構成した。【援助の実践】の内容は、<私は、一緒に歩行するにあたって、患者の歩行ペースを合わせることに注意した>など学生が実践した歩行や食事援助、入浴介助の学びが多かった。【対象の理解】の内容は、<重症心身障害といっても様々な症状があるため、個人の症状を正しく理解し援助していくことが重要だと思った><可能な限りで自分も体験することは対象者を理解するための1つの手段ではないかと思った>など、対象理解の重要性を学んでいた。【実習前後の変化】の内容は、<実習が終わってみると私の障害を持つ方への印象は大きく変わった>など、初めて心身障害児（者）に関わり、先入観や偏見をもっていたが、半日の実習での関わりを通して、イメージが変わったという記述が多かった。【今後の課題】では、<自分の援助技術の乏しさにも気づき、短い実習時間の中でも技術の改善点を見出すことが出来た>など看護技術の面だけでなく、実習姿勢として積極的に関わることや普段の生活の見直しの記述が多かった。【病院との違い】では<看護師の仕事内容でも、援助する対象者が重症心身障害者だと一般の病院とは異なる><病院だけではなく、病院とはまた違う環境や目的での看護があることを知った>と、

病院実習での体験と比較しての学びを挙げていた。[既習内容との関連]では、<この考えは、ヘンダーソンの「看護の基本となるもの」の「その人ができるだけ早く自立できるように仕向けるやり方で行う」に沿っているものだ>と看護理論を用いて裏付けを行っていた。[生きる意味]では、<生きているからこそ家族との触れ合いを通して生きていることに対する希望や喜びを感じることができる>と障害をもって生きることを意味を考えている記述がみられた。これらの7サブカテゴリーを【障害をもつ利用者の理解】とした。

次に、コード数が多かった【利用者の状況】は216コードから5サブカテゴリーを挙げた。[日常生活の現状]の内容は、<食事といっても、口から摂取できる方もいれば、胃や腸にチューブを繋いでそこから栄養を摂取している方もいた>といった食事、排泄などのADLに関する記述が多かった。[家族の支えと楽しみ]の内容は、<家族とのふれあいを大切に、絆を深めていただくことは、利用者の人生を潤す大きな要因になる>と、家族の存在の重要性を学んでいた。その他にはベッドサイドにあるおもちゃやおしゃれ、趣味に関する記述であった。[コミュニケーション障害の現状]の内容は、<コミュニケーションでは言葉のやり取りのできる方もいたし、表情で反応して下さる方もいた>や<話しかけると笑ったり、手をたたいたり、首を振ったりして体を使って表現していた>といった対象のコミュニケーション能力についての記述であった。[身体的特徴]は<この利用者は起きているときは自発呼吸で寝ているときは機械で呼吸をしている>など気管切開をしている利用者、人工呼吸器を装着した利用者、寝たきりや症状の進行といった身体面に関する記述が多かった。[パニックなどの危険な状況]の内容は、<自傷行為を行う方には顔にカバーを付けてけがをしないようにしていた><少しのことで骨折したり脱臼したりする危険性がある><誤嚥を起こしやすい患者が多かった>など、利用者の危険な状況の記述があった。以上の5サブカテゴリーから【利用者の状況】とした。

【快適な環境づくり】のカテゴリーでは、162コードから3サブカテゴリーを構成した。[トイレなどの工夫]のサブカテゴリーでは、<トイレは高床式トイレが設置されており、横になった状態でもできるようにになっていた>のトイレや移乗動作の補助を行うリフトの使用、入浴施設、個人に合わせた車いすなどを挙げていた。[安全な環境づくり]の内容では、<ベッドの柵のほとんどは保護マットで覆われ、マットで仕切りがされて、利用者さんに合わせた安全面での工夫がされていた>のベッド柵の工夫や、<ドアには必ず鍵が付いていて、部外者が勝手に入ったり、利用者が外に出たりしないようになっていた>と鍵をかける意味を挙げていた。[生活しやすい環境]では、<環境によって利用者の方が感じる障害の大きさ

が違い、利用者の方は環境を選ぶのが難しいため提供していくことが必要である><その人の環境を変えると、生活のしやすさが変わるということ>など、利用者の生活を考えた環境づくりがされていることを学んでいた。以上の3サブカテゴリーから【快適な環境づくり】とした。

【非言語的コミュニケーションの困難さと重要性】のカテゴリーでは、122コード、7サブカテゴリーを構成した。[コミュニケーションの困難さ]では、<実際に利用者の方々との交流では何を話してよいのか分からず、思うようには相手の思っていることなどを読み取ることが出来なかった><言葉に詰まっしまい、ただその方を見ていることしかできなくなった>などコミュニケーションについての困難感を感じていた。[非言語コミュニケーションの大切さ]では、<言葉で伝えることができない分1つ1つの身振りや目の訴え、表情を見逃すことができずそこから気持ちを汲み取らなければならない><コミュニケーションは言葉によってのみ取れることではない>などの言語的コミュニケーションだけでなく、非言語的コミュニケーションの重要性を学んでいた。[コミュニケーションの取り方]では、<笑顔やスキンシップをとり、ゆっくり話すことに気がつけた><しっかり目線を合わせてはっきりしゃべり、時にはボディータッチもしながら意思疎通をすることだ>と表情や目線、立ち位置など、コミュニケーションの取り方を体験していた。[対象を理解しようとする姿勢]では、<言いたいことが分からなくてもそのままにするのではなく、理解しようとする姿勢を学んだ><長く関わることで気づくこともあるが、まず自分が利用者に関心を持ち、伝えたい感情や意思を理解しようという心構えが大切になるとわかった>など、コミュニケーションをとる姿勢を学んでいた。[看護師のコミュニケーション]では、<看護師は、ちょっとした表情の変化やいつもと異なる行動などで気持ちを接していた><看護師さんが利用者さんの一人ひとりに自然に話しかけている姿を見てとても刺激を受け、私も将来一人ひとりと向き合い、愛情を注ぎたいと心から思った>ことから、看護師のコミュニケーションをロールモデルとした記述が多かった。[反応があってもうれしい]では、<私が話しかけると言葉によっての返事はなかったが、笑って反応してくれたり、私と目を合わせてくれたり、腕を動かして反応してくれた>と、反応があったことに対する喜びが記述されていた。[コミュニケーションの課題]では、<言葉だけでない方法でもコミュニケーションをとれるように自分なりに工夫して、様々な状況の人々と関わっていききたい>と非言語的コミュニケーションに対する課題の克服を記述していた。以上の7サブカテゴリーから【非言語的コミュニケーションの困難さと重要性】とした。

【他職種との連携】では、36コード、2サブカテゴリー

から構成した。[他職種連携の大切さ]では、<数多くのボランティアの方々から成り立っており、様々な医療従事者の方もいることを知った><作業療法士は日常生活に必要な様々な動作が円滑に行えるように、運動や遊びを通じて働きかけている>と、理学療法士、歯科医、ボランティアなど多くの連携で成り立っていることを学んでいた。また、<情報を共有することによって、ミスをなくし、みんなで患者の生活を支援していることが分かった>と情報共有の大切さを学んでいた。[看護と福祉の融合]では、<看護科と支援科の部門に分かれて健康面と生活面、医療と福祉の考え方が融合されている><「LIFE」に「生活」「命」「人生」という意味で、福祉の基本となる考え方が分かる>といった福祉の視点が広がっていた。以上の2サブカテゴリーから【他職種との連携】とした。

【施設の方針】のカテゴリーでは、83コード、2サブカテゴリーから構成した。[施設が大切にしていること]の内容は、<利用者が生活しやすい環境を整え、利用者に対する障害を小さくするのに努めている><実習前に資料館を見学して「やさしい言葉も治療、お米を持たせるのも薬になる」という言葉が印象に残った>など、資料館や看護師長からのオリエンテーションで感じた、施設が大切にしていることが挙がっていた。[イベントやシステムづくり]では、<生涯を過ごすことになるので、その人生がより良いものにしていくためには、多くのことを経験できるイベントがある><季節の行事や週1回の喫茶コーナー、買い物など一生を過ごす人がただ治療をするだけでなく毎日の生活を楽しく過ごせるような工夫がされている>など行事に関する記述がみられた。以上の3サブカテゴリーから【施設の方針】を挙げた。

IV. 考察

1. 基礎看護学実習Ⅰ（施設実習）の目標達成度

実習目標①の「対象者と直接的・間接的に関わることにより、看護の対象者の生活状況を理解できる」については、【障害をもつ利用者の理解】【利用者の状況】【非言語的コミュニケーションの困難さと重要性】に示されており、心身障害児（者）の生活状況や心理面・身体面の障害、コミュニケーション障害について、理解できていると考える。しかし、多くの学生は初めて心身障害児（者）と関わることの不安や戸惑いを感じており、事前のオリエンテーション時に、映像でイメージを広げることが必要である。事前学習では、心身障害児（者）について自己学習をしてから実習に臨んでいるが、文字で分かることと実際に身体の拘縮や言語障害があることを体感することとは違いがある。利用者とは半日しか関わらない現在の実習形態では、戸惑いだけで実習が終了してしまうの

では効果が薄れる。できるだけ実習の前に利用者の身体状況を具体的に理解しておく方が実習に抵抗なく入っていける。そのために、利用者の状況を視覚的に理解しておく必要があると考える。

実習目標②「対象者の生活を取り巻く環境について理解できる」については、【快適な環境づくり】【施設の方針】に示されている。トイレでは高床式の寝たまま排泄できるものや、車いすが利用者個々に合わせて作成された特別なものなど、障害に合わせた環境面での工夫に関する記述が多かった。学内や病院にあるものは一般的なものが多く、学生は初めて見る環境に困惑していた。しかし、学生は利用者が生活しやすい施設内の環境を整えることで、利用者のもつ障害を小さくする工夫がされていることを学生は理解できていたので、目標は達成されていると考える。記述の多くは伝聞であり、オリエンテーションでの気づきが多かったことからオリエンテーションの重要性が明らかである。また、スポンジを巻いている高いベッド柵や病棟の出入り口に鍵がしてあることに対して、学生は驚きとともに利用者の安全面に配慮していることを学んでいた。利用者を取り巻く環境は生活のしやすさの視点とともに、障害の程度によっては危険な状況を防止し安全で快適な環境づくりの視点が深まっていると考える。また、リフト移乗を体験した学生が多かったため、利用者・援助者双方の負担を軽減するリフト移乗に学生は関心をもっていた。これは学内演習では行っておらず、初めて見た学生も多かったといえる。移乗動作は看護師の腰痛問題にもつながっているため、今後ますます病院などにも導入されていくと思われるので、学内演習に取り入れる必要がある。

実習目標③「看護の場における対象者と看護者の援助関係について理解できる」については、【看護の役割】【障害をもつ利用者の理解】【非言語的コミュニケーションの困難さと重要性】に示されている。施設での看護援助は、<刻々と変化する利用者の生き方に合った援助の方法を追求し提供する>と表現しているように、生涯を施設で過ごすことが多い利用者のLife（生命・生活・人生）に沿った看護援助をしていると学生は捉えていた。非言語的コミュニケーションの多い利用者に対して、看護師の分かるようとする姿勢とそれに反応した利用者の笑顔から信頼関係や個別性を尊重していることを感じ、目標は達成されている。

実習目標④「病院・施設・家庭の機能について理解できる」では、【障害をもつ利用者の理解】【快適な環境づくり】【他職種との連携】【施設の方針】に示した。施設では利用者が生涯を過ごす生活の場であることから、環境面での工夫とともに多くのコメディカル、ボランティアが協働していることで利用者の生活を支えていることを学生は学んでいた。施設では、医療・看護の視点だけ

ではなく、福祉の視点が必要である。病院の機能も持ち、家庭の機能も持ち合わせた施設で実習することの大きな目的がここにあるので、実習記録に記述があることで、目標は達成されていると考える。

実習目標⑤「看護者としての基本的態度を養うことができる」では、【障害をもつ利用者の理解】【非言語的コミュニケーションの困難さと重要性】に示されていた。学生は実習を通して障害者の状況を理解し、実習前後でイメージが変化していた。病院との違いを実感し、実習での体験を、ハンダーソンを使って意味づけをしていることから、看護観を深めているので目標は達成されていると考える。病院との違いでは、ナースコールがなかったことを挙げていた。心身障害児（者）にとってナースコールを押せる利用者が少ないことから、ナースコールは設置せずに、看護師の観察や見回り、モニターによって利用者の異変に気づいていることから、観察の重要性を学んでいた。また、心身障害児（者）の援助を通して、生きる意味について考えている学生がいた。心身障害をもち日常生活も自力ではままならない状況にありながら家族に見せる笑顔から、人が生きる意味について考察しているものであった。学生自身も結論が出ていないかもしれないが、この実習が一石を投じたことに意味があると考ええる。

2. 病院実習での学びとの比較

前回の病院実習後の学びに関する調査では、【看護の対象と看護師との関係】【個別性の尊重】【医療安全の重要性】【チーム医療の重要性】【知識・技術の必要性】【療養環境の工夫】【看護師の行動】【療養生活の理解】【命の尊重】【看護師の魅力】の10カテゴリーが抽出されていた⁷⁾。今回の福祉施設実習でのカテゴリー及びサブカテゴリーと比較すると、福祉施設実習では対象の理解に関するサブカテゴリーが多く挙がっていた。対象の個別性を尊重し、対象に合わせた援助、看護をすることの重要性を認識していることが明らかになった。また、福祉施設に看護師がいることを知らなかった学生もおり、今回の実習で初めて知ったという記述があった。病院だけではなく、障害者に関わるという『看護活動の場の広がり』の意味でも、今回の実習の効果があったと考える。

謝辞

今回の研究にご協力いただきました学生に深く感謝い

たします。

文献

- 1) 看護学教育の在り方に関する検討会：看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標。文部科学省高等教育局医学教育課，2004.
- 2) 岩脇陽子，滝下幸栄，今西美津恵他：早期体験実習としての基礎看護学実習の学習効果と実習満足度に関連する要因。京都府立医科大学看護学科紀要，17，31-39，2008.
- 3) 相原優子，勝山貴美子，渡邊順子他：看護学生が捉えた早期体験実習における体験の意味。日本看護医療学会雑誌，7(2)，27-35，2005.
- 4) 木下里美，大塚真理子，朝日雅也他：保健医療福祉学部1年次のフィールド体験学習の効果と実習施設との関連。埼玉県立大学紀要，4，35-42，2002.
- 5) 杉本幸枝，土井英子，石本伝江：基礎看護学実習一日実習における効果と課題－学生の実習記録の内容分析を通して－。新見公立短期大学紀要，19，137-148，1998.
- 6) 小野晴子，杉本幸枝，土井英子他：基礎看護学一日実習の効果と位置づけの検討－実習記録の内容分析を通して（Part II）－。新見公立短期大学紀要，22，53-63，2001.
- 7) 山本智恵子，土井英子，杉本幸枝他：基礎看護学実習 I の病院実習での学びと課題。新見公立大学紀要，33，119-124，2012.
- 8) 野村志保子，山口瑞穂子，村上みち子他：基礎看護学実習 I における学生の学び。順天堂医療短期大学紀要，2，1-16，1991.
- 9) 神庭純子，松下延子，藤生君江他：4年生看護基礎教育課程の1年次「ふれあい実習」の教育効果（1報）－学生の自己評価を分析して－。岐阜医療科学大学紀要，2，107-114，2008.
- 10) 鈴木秀樹，庄子幸恵，板垣恵子他：看護学生の早期体験実習における課題レポートの分析（1）－テキストマイニングの手法を用いて－。東北文化学園大学看護学科紀要，4(1)，51-58，2015.
- 11) 今井恵，松永早苗，千田美紀子他：基礎看護学実習 I における学生の学び－レポートの分析－。聖泉看護学研究，4，39-46，2015.

表1 重症心身障害児（者）施設実習での学び（その1）

カテゴリー	サブカテゴリー ()はコード数	主なコード
看護の役割	看護師の援助内容(116)	刻々と変化する利用者の生き方に合った援助の方法を追求し提供することも重要である
	信頼関係の大切さ(54)	生涯をここで生活する人がほとんどいると考えると、利用者さんとの間に信頼関係が何より重要である
	観察の大切さ(52)	たとえ毛穴ほど小さな変化であっても、それを見逃さない観察をする
	安全対策(40)	利用者の安全を第一に考えており命には代えることができない
	個別性の尊重(34)	オーダーメイドの看護という言葉があったが、利用者の気持ちを一番に考えていた
障害をもつ 利用者の理解	援助の実践(92)	私は、一緒に歩行するにあたって、患者の歩行ペースを合わせることに注意した
	対象の理解(51)	重症心身障害といっても様々な症状があるため、個人の症状を正しく理解し援助していくことが重要だと思った
	実習前後の変化(33)	実習が終わってみると私の障害を持つ方への印象は大きく変わった
	今後の課題(31)	自分の援助技術の乏しさにも気づき、短い実習時間の中でも技術の改善点を見出すことが出来た
	病院との違い(27)	看護師の仕事内容でも、援助する対象者が重症心身障害者だと一般の病院とは異なる
	既習内容との関連(26)	この考えは、ヘンダーソンの「看護の基本となるもの」の「その人ができるだけ早く自立できるように仕向けるやり方で行う」に沿っているものだ
	生きる意味(9)	生きているからこそ家族との触れ合いを通して生きていることに対する希望や喜びを感じることができる
利用者の状況	日常生活の現状(73)	食事といっても、口から摂取できる方もいれば、胃や腸にチューブを繋いでそこから栄養を摂取している方もいた
	家族の支えと楽しみ(46)	家族とのふれあいを大切に絆を深めていただくことは、利用者の人生を潤す大きな要因になる
	コミュニケーション障害の現状(43)	コミュニケーションでは言葉のやり取りのできる方もいたし、表情で反応してくださる方もいた
	身体的特徴(37)	この利用者は起きているときは自発呼吸で寝ているときは機械で呼吸をしている
	パニックなどの危険な状況(17)	自傷行為を行う方には顔にカバーを付けてけがをしないようにしていた

表 1 重症心身障害児（者）施設実習での学び（その 2）

カテゴリー	サブカテゴリー ()はコード数	主なコード
快適な環境づくり	トイレなどの工夫(89)	トイレは高床式トイレが設置されており、横になった状態でもできるように なっていた
	安全な環境づくり(39)	ベッドの柵のほとんどは保護マットで覆われ、マットで仕切りがされていた りと、利用者さんに合わせた安全面での工夫がされていた
	生活しやすい環境(34)	環境によって利用者の方が感じる障害の大きさが違い、利用者の方は環 境を選ぶのが難しいため提供していくことが必要である
非言語的コミュニケ ーションの困難さと 重要性	コミュニケーションの困難さ(31)	実際に利用者の方々との交流では何を話してよいのか分からず、思うよ うには相手の思っていることなどを読み取ることが出来なかった
	非言語コミュニケーションの大切 さ(19)	言葉で伝えることができない分1つ1つの身振りや目の訴え、表情を見逃 すことができずそこから気持ちを汲み取らなければならない
	コミュニケーションの取り方(18)	笑顔やスキンシップをとり、ゆっくり話すことに気がつけた
	対象を理解しようとする姿勢(17)	言いたいことが分からなくてもそのままにするのではなく、理解しようとし て一層積極的に関わろうとする姿勢を学んだ
	看護師のコミュニケーション(14)	看護師は、ちょっとした表情の変化やいつもと異なる行動などで気持ちを 接していた
	反応があっとうれしい(12)	私が話しかけると言葉よっての返事はなかったが、笑って反応してくれ たり、私と目を合わせてくれたり、腕を動かして反応してくれた
コミュニケーションの課題(11)	言葉だけでない方法でもコミュニケーションをとれるように自分なりに工夫 して、積極的に様々な状況の人々と関わっていきたい	
他職種との連携	他職種連携の大切さ(28)	数多くのボランティアの方々から成り立っており、様々な医療従事者の方 もいることを知った
	看護と福祉の融合(40)	看護科と支援科の部門に分かれて健康面と生活面、医療と福祉の考え 方が融合されている
施設の方針	施設が大切にしていること(42)	利用者が生活しやすい環境を整え、利用者に対する障害を小さくするの に努めている
	医療と福祉の融合(32)	施設の種類としては 18 歳未満の方が入所する医療型障害児入所施設と 成人の方のための医療介護事務所が合わさった施設である
	イベントやシステムづくり(9)	生涯を過ごすことになるので、その人生がより良いものにしていくため には、多くのことを経験できるイベントがある

